

寺報 善 巧

発 行

☎ 938-0862 富 山 県
黒部市宇奈月町浦山497
白 雪 山 善 巧 寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975
メール info@zengyou.net
URL http://www.zengyou.net

講題 「輝くいのち」

高務 哲量 師

御 正 忌

一月十三、十六日

寺
ごみ

一 月

一 日 修正会

三 日 日校かるた会

八 日 日校成人式

一二日 御正忌準備

御 正 忌

一三日 一時 お速夜

一四日 一時 お速夜

一五日 十一時

下村お講

一時 お速夜

七時 お初夜

一六日 十一時

浦山・板屋・

熊野・大橋お講

一時 ご満座

ご講師 高務哲量師



住職継職以降、八巡目のほんこさん参り。「一年があつという間やね」という通例のご挨拶にも実感が伴ってきました。善巧寺のほんこさんは、今回からどの地区もなるべく午前中に終わるように日程を調整しています。それは、葬儀等の突発的な仏事が入った時の対応や、一軒一軒を大切に勤めたいという配慮からです。

親鸞聖人のお師匠である法然聖は、「念仏」を中心としたものの考え方を徹底された方でした。それは例えば、当時タブーとされていた僧侶の結婚に対して

「聖（妻帯しない僧）では念仏できないというのであれば、妻帯して念仏しなさい。妻帯したために念仏ができないというのであれば、聖になって念仏しなさい。」

とおっしゃっています。親鸞聖人はそれに従い、弾圧を覚悟の上、いのちをかけて結婚を決断され

何が中心か

たとお聞きします。一方で、私たちは何を中心として物事を判断しているのでしょうか。法然聖や親鸞聖人のように突き詰めた言葉はなかなか言えるものではありませんが、浄土真宗にご縁のあつた者は、やはりそれにならつて、「手を合わすご縁」を中心に物事を判断していきたいものです。

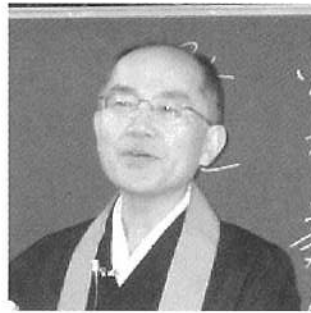
年に一回、三十分ほどのご縁。それは一生のうちでマバタキほどの時間ではありませんが、浄土真宗において一番大切な勤めです。それを、いかにして、大切さを失うことなく勤めあげていくかが僧侶の本分でありましょう。とは言っても、なかなか理想どおりにはいかず、時に樂をしたいという心も湧き出てくる場合があります。そんな姿を目にした時は、どうぞ叱咤激励をお願い致します。ご一緒に大切な法事を勤め上げていきましょう。

雪山 俊隆



愚禿の名のり

行信教校講師 天岸浄圓師



このたびは、親鸞聖人のお名前のおいわれから、聖人のみ教えをお話しさせて頂こうと思っております。

親鸞聖人は、三十五歳の時に越後へ流罪にられました。それをひとつの機会にしまして名乗られたお名前が「非僧非俗愚禿親鸞」と申します。そして、このお名前を名

乗られた後は、生涯名を改められることのないまま九十年の人生を全うされました。それ以前には、現在わかつておりますだけで「愚禿親鸞」を合わせますと四回、名を変えておられます。

一度目は「範宴少納言公」と呼ばれました。九歳で仏門に入られた時、慈円僧正から名付けられたお名前ですね。「範宴」と名を頂かれました。「少納言公」と申しますのは、お寺の中での呼び名ですね。このお名前を頂かれて比叡山に登り、そして天台宗のお坊さまとして

修行が始まっていくわけです。やがて二十九歳にられた時、聖人は比叡山の修行を自らの意志でお止めになつて、山を下つて法然聖人のもとに改めて入門されました。二十年のご修行と云えば、これはもう一角のお坊さまとしての素養はきつちりと積み重ねた上での決断でしょう。そして、それまで積み重ねられたことのすべてを捨てて、法然さまのもとにおいてになりました。これは非常に大きな意味を持ちます。あえて私は「すべてを捨てて」と申しました。

法然さまには大勢の弟子の方がおられました。しかし、その中には捨てたつもりが捨てきれない方もおられたようであります。それが後々、法然聖人のご法義を様々に分派されていく経緯のひとつでしょうね。その時にお師匠さまか

ら賜つたお名前が「綽空」と申します。正信偈の中に「善導独妙」と讃が変わるところがあります。その直前の所にこのような言葉が綴られています。「道綽決聖道難証」

道綽さまは聖道門の教えが、お悟りを極めて開きにくい教えであるということを私に確かに教えてくださいました。

「唯明浄土可通入」

今の時の私たちにとつては、本当の意味でお悟りにかなうことが出来るのは、浄土の教えただひとつであります。

お釈迦さまの教えを、浄土門と聖道門の二つに分けてくださったのが道綽師というお方です。

そして、今末法と言われる時には聖道門は悟りを得難い教えだ、ゆえに、今の時の人々は、浄土の本願の教えによつてのみ、お悟りを開かせて頂くことが出来るのですよ、と

言われました。そのことを、親鸞聖人のお師匠さまである法然聖人のお受けになつて「聖道門を捨てて浄土門に帰するのですよ」と、さらにハッキリとご法義のあり方をお教えになつたわけですね。その道綽師のお名前から一字を、親鸞聖人の法名として、法然聖人が選ばれたわけなのです。下の字の「空」は法然聖人の法名「源空」から一字を授けてあります。こういう名のつけ方を「かたみみな」と言います。昔の人たちは実名（本名、いみな）というものと、「呼び名」（仮名）の二つの名前を持つておられたのです。

少し余談になりますが、「法然聖人」の「法然」は「呼び名」です。そして、「源空」が「実名」となります。どういうことかと言いますと、当時の一つの礼儀としまして、実名

を他人が用いるということとは、非常に失礼なことだったのです。特に、上

下関係、人間関係の中で、年下の者が年上のお方に向かつて、実名を呼ぶということは無礼千万なことでした。それで、そういう時には「呼び名」を使うわけですね。その呼び名が「法然房」もしくは「法然聖人」という呼び方です。ですから、親鸞聖人はほとんどの場合、「法然聖人」と書いておられます。正信偈は公文書でお聖教になりますから、呼び名を使うと逆に失礼にあたり、実名を使います。でも実名だけでも失礼になりますから、上に「本師」と付けます。有名な言葉で「善信房（親鸞聖人）の信心も源空が信心もただひとつ」とおっしゃった時は、法然聖人自らがおっしゃっていますから、「源空が」とおっしゃるわけです。そのよ

うなひとつの決まりがあったのです。

ですから、源空の「空」の一字をお弟子に与えるということとは、親鸞聖人に対する想いの深さがうかがえます。また、さきほどあえて申し上げましたように、「聖道門を捨てて浄土門に帰する」と言われた道綽禪師の「綽」の一字を選ばれたということは、親鸞聖人がその

積み重ねられたことのすべてを捨てて

です。聖道門もある、浄土門もある、どちらも仏法だから悟りを開けるだろう。これは言葉の中では出来ず。でも、実際は成り立たない言葉です。自分の足を置けるのは、道が二つあっても、一つにしか置けません。なんでしたら、両方に置いて行つてごらんさい。在来線も京都へ行く。新幹線も京都へ行く。だか

があります。親鸞聖人も比叡山で二十年でしょう。他のお弟子方も、それぞれに積み重ねてきた年月があるわけですね。それは、いわば、自分自身で自分自身を仏法の色に染めてきたようなものです。その染めた色を、きれいに落として白にして、新しい道に入っていければ理想的なのです。白に戻っていますと、新しい色が

人の色が重なるわけです。でも本人は白に戻ったつもりですから、これで法然聖人の教えを受け継いだんですよとおっしゃるわけですが、やはりどこかに元の色が残っています。そういうお方が法然聖人のお弟子の中には大勢おられました。その中で、このようなお名前を名乗っていくことを許された方というのは、白に戻ることが出来た者だと、法然聖人が見抜かれた証拠だと思ふのです。

ような方であったことを、入門に際して感じ取っておられたのでしょうか。

「すべてを捨てて新しく入門する」ということと、「今までのものを両手に持ちながら捨てたつもりで入門する」、その違いを法然聖人は見抜かれていたのでしょうか。

二つのことを一つにするということは無理なの

らと言つて、片足を在来線に乗せて、もう片足を新幹線に乗せて、行けーと言つても、口では言えますが、実際それは無理なことです。そうしますと、やはりどちらかの影響が出てくるわけです。

法然聖人の主なお弟子方は、それぞれに修行なり学問なり、いわゆるキャリアがあつて、積み重ね

ハッキリと染まります。再入門された方というのは、みんなそのつもりでした。自分は白に戻ったという意識なのですが、その意識と現実が違いました。どこかに色なり柄が残るわけですね。その残った色と法然聖

ようこそお寺へ

転法輪 有花著 200円

「お坊さんが家にお参りにくるときって、どんな準備をすればいいのかしら？」

新米若坊守が、門徒の立場になってお寺参りの方法や仏事の基本をやさしく教えてくれる好著。お寺参りには経本やお念珠を持っていくことや、お寺で仏前結婚式や初参式を行っていることなどがつづられる。

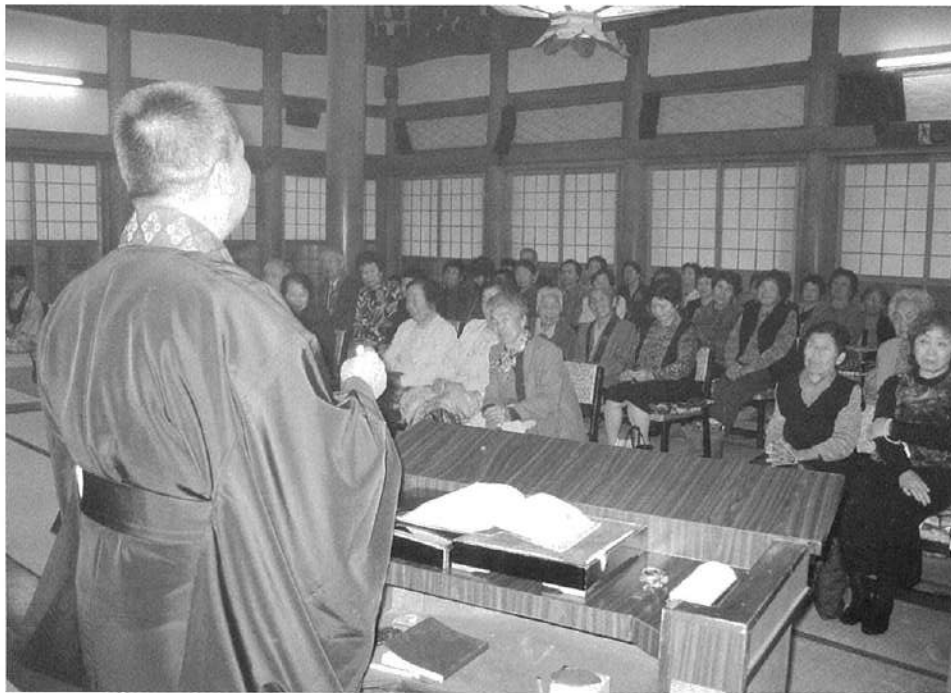
探究社刊 ☎ 075 (343) 4121。



報恩講

十月十九・二十日

寺報の詰め作業からはじまり、清掃、荘厳等、約一カ月前から報恩講の準備がはじまります。お



かげさまで今年も無事おつとめできました。ご講師は若栗の発願寺住職、川崎順正師。夜のお座「絵解き説法」にも磨きがかかり、味わい深くお聞かせくださいました。

空華忌

十一月四・五日



今年は善巧寺とご縁の深い行信教校より学生さんが四十数名ご参拝。とても賑やかな法要となりました。ご講師は同校の先生天岸浄圓師。一言一句を緻密に積み重ねられたご法話に一同深く頭が下がりました。尚、今回のご法話は寺報二・三面において連載となります。





清掃奉仕

十月九日、十二月十一日清掃奉仕が行われました。清掃奉仕は、年間の主要行事に合わせて年に四回行われています。仏さまのお給仕。大切なご奉仕です。



おぼつけはん

仏さまにお供えする「おぼつけはん」。正しくはお仏飯と言います。仏さまに毎朝お供えするもので、炊きたてのごはんの「お初穂」を、報恩感謝の心持ちでさし上げます。

もちろんアミダさまは、法喜をもつて食とす

と示されてある通り、ごはんを食べられることはありませんが、わたしたち凡夫は、ごはんのおかげで命がえ、めでたき仏法を聞くことができたのですから、仏さまにそれをそなえ、おつとめのあとそのお下がりをお願いして仏祖の加護をよろこぶわけであります。

盛り方は「蓮苔形」（れんがいけい）といって、ハスの花のつぼみのように盛り上げます。なお、盛り方にはもう一つあって「蓮実形」（れんじつけい）といい、ハスの実に

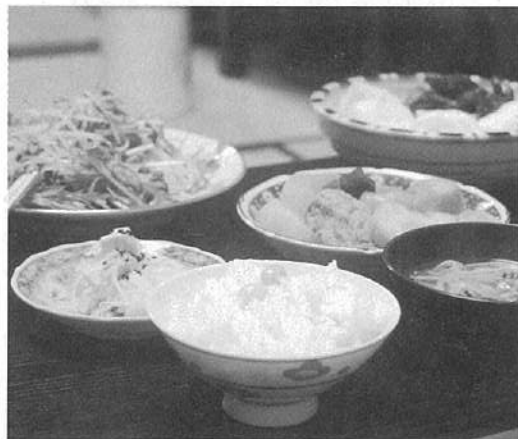
模して盛りつけるもので、お東（東本願寺派）はこの盛り方です。

蛇足ですが富山でいう「おぼつけはん」は「お仏器」（おぶつき）つまりお仏飯を盛る器からなまったものではないかと考えられます。

お講とは

お講というのは、本来「講ずる」という意味で、仏さまのむずかしいお経を、わかりやすくお話するということでした。それが聞く側の集まりまで含めて「お講」というようになったのです。

古くは、親鸞聖人の時代からあったようで、その頃から門徒衆が相集い、読経、説教聴聞のあと、そろって「お斎（おとき）」をいただいたそうです。



善巧寺ではお寺がはじまって以来、五百余年、門徒衆の寄合い談合の場として、お講が勤められてまいりました。この美しい風習が、今も続いていることは誠に喜ばしいことです。

「お講」

毎月一日、十六日
午前十一時半から

*十月一日、八月十六日、九月一日・十六日はお休みです。また、一月十六日、七月十六日、十月十六日は法要と兼ねてのお講となり、十一時からです。

寺 ごよみ

二月

- 一日 浦山お講
- 一三日 生地荻生報恩講
- 一四日 生地報恩講
- 一六日 下立お講
- 二〇日 舟見報恩講
- 二二日 入善報恩講
- 二七日 能野報恩講
- 二八日 析屋報恩講

寺 ごよみ

三月

- 一日 浦山お講
- 六日 三日市報恩講
- 九日 下立報恩講
- 一四日 浦山報恩講
- 一五日 析沢お講
- 一六日 浦山報恩講
- 一九日 雪ん子劇団
- 二〇日 コラーレ公演
- 二二日 雪ん子春公演
- 二四日 浦山報恩講
- 二六日 浦山報恩講
- 二九日 浦山報恩講

平成二十三年、本山で親鸞聖人七百五十回大遠忌が勤修されます。

御正忌

親鸞聖人のご命日に
行われる厳肅な法要

一月十三日 午後一時 お逮夜

法話：転法輪正視師

十四日 午後一時 お逮夜

法話：住 職

十五日 午前十一時 お講

午後一時 お逮夜

午後七時 お初夜

十六日 午前十一時 お講

午後一時 ご満座

「輝くいのち」

高務 哲量 師（福井）



日曜学校 かるた大会

一月三日 午前十時



御正忌準備

一月十二日 午前八時半



日校成人式

一月八日 午後一時



雪ん子劇団 コラーレ公演

三月二十一日

雪ん子劇団 卒業公演

三月二十四日



合 掌

境内の老イチョウが全部葉を落としたと思ったら、初雪が降りました。今年の雪は多いのか少ないのか寒いか暖冬かと取り沙汰されていますが、確実に秋から冬へ、冬から春へと日は過ぎていきます。飢渴寒暑ばかりに気を囚われず肝心なことに目を向けなさいとお釈迦さまはおっしゃいます。

＊ ＊ ＊

暮れを迎えて嬉しいニュースが飛び込みました。赤ちゃん誕生です。雪ん子OG仲良し三人娘が結婚しましたが、一人は九月に、あとの二人がこの十二月にほとんど同時に出産しました。親も子も同級生です。あえてよかったですね。

(R)

